

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

* <> で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

☆新キャラ

1. 零 (ゼロ) …黒髪の少年

☆解説

1. 中国拳法…中国拳法には大きく”内家拳”と”外家拳”の二つに分かれます。

”内家拳”は体内の気を操り、力に変える拳法で、習得には時間が掛かります。

(例…八極拳、太極拳)

”外家拳”は肉体を物質的に鍛える拳法で、その為”内家拳”より時間が掛からず、

即戦力になる。(例…詠春拳、洪家拳)

～第50章～<騒ぎの後>

昨日のドンチャン騒ぎが嘘の様に施設の朝は静まり返っていた…。

ミーティングルームに誰かが入ってきた。その気配に気づき、蒼凱が慌てて目を覚ますと眼鏡を掛け直し振り返った。

「龍冴さん？もう起きたんですか？」と寝ぼけ眼の蒼凱が腕時計を見ながら言った。

時計は朝の5時を指していた。

「ああ。ってか、お前。またここで寝たのか？いくらする事が貯まってても寝る時はちゃんと寝ないと体に毒だぞ。」と龍冴が呆れた感じで言った。

「すいません。」と蒼凱は謝りつつ、内心では『誰のせいでこんな所で眠っちゃったと思ってるんだか…。』とってしまった。

蒼凱はあくびをしながら立ち上がると背伸びをした。

「じゃあ、僕。少し寝ますから、報告書の点検をお願いします。それじゃあ、おやすみなさい。ハァ～」とあくびをしつつ、蒼凱は部屋を出ていった。

龍冴は「おやすみ。」と明るく言うと、ついさっきまで蒼凱が座っていた椅子に座り、蒼凱が徹夜して作った報告書を確認し始めた。

ー3時間後・朝8時ー

龍冴が一通り報告書を校正し終え、一息つこうと立ちあがった時、誰かが部屋に入ってきた。それは昨日少々苦手なお酒を飲まれた凱歌だった。その予想外の人間の登場に龍冴は驚いた。「おっ！おはよう。目覚めはいいようだな。一番は意外にも凱歌だったか…。」と龍冴はコーヒーを片手に言った。

凱歌は眠たそうに目を擦りながら不思議そうな顔して「おはようございます。意外って何の事ですか？」と言った。

龍冴は凱歌にコーヒーを飲むかを訊きながら、その凱歌の言葉に状況を把握し始めた。

そう、凱歌は昨日の事を全く覚えていないのである。そして、二日酔いすらなかった。

龍冴が凱歌にコーヒーを渡そうと1歩足を踏み出した時、再び扉が開いた。

「おはようございます。やっぱりお二人共、早いですね。私なんてまだ眠くて…」と天山が笑いながら言った。

「おはよう。やっぱり酒豪のお前は問題無しという訳か。凱歌に例の実験中の秘薬を使ったな。」と龍冴は探る様に言った。

「ええ。使いました。でなければ、凱歌は今頃目覚めない眠りの中だったかもしれませんからね。」と天山は明るく答えた。

その言葉に凱歌は動揺してしまった。

「あっ。すいません。物騒な事を朝から言っちゃって。この調子だと昨日の晩の事は覚えてない感じですね。」と天山が言った。

「昨日の晩の事？夕食を食べてからの事をよく覚えてないんです…」と凱歌は心配そうに答えた。

「昨日の夕食後にきなこさんとプロフェッサーから、お二人共、お開きになるまでお酒を飲まされてたんです。

龍冴は飲んだ後こそ、気を失ってはしまいますが、アルコールの分解能力は酒豪と呼ばれる人間より5倍強はありますから、二日酔いにはなりません、凱歌、貴方は別です。

貴方は本当に分解能力が未発達なので、最終的に急性アルコール中毒になりかかってましたので、特別な薬を投与しました。

薬については私よりも開発者の龍冴に訊いた方がいいでしょう。」と天山は龍冴に続きを任せてコーヒーを用意し始めた。

「えっ。俺が説明するのか、何か頭がボーっとしてて変な感じなんだけどな…。まあいいか。

その薬というのは、簡単に言えばアルコールの分解能力を高めると同時に分解もするという薬なんだ。

これは急性アルコール中毒の患者や、君みたいに一切お酒が飲めないが、どうしてもお酒を飲まなければならない状況の時の為に、開発した薬だ。しかし、まだ未完成なんだけどな…。

どんな人間にも平等に効かないと、いけないんだけど、効きに差が結構あるので世間には

出ていないんだ。結構、俺らも色々シンプルなお薬の開発もしているんだぜ。」と龍冴は

凱歌にコーヒーを渡しながらか説明した。凱歌はその説明で、龍冴の仕事を垣間見た気がした。

「今、頭がボーっとすると言っちゃったね…。もしかすると。龍冴、ここに座ってください。

いいから早く！」と天山が龍冴を椅子に座らせた。

龍冴は何が起きたのか理解が追いつかない内に、左の人差し指を手の平サイズの計測器のような物に押し付けられた。押し付けられたのが痛かったのか、龍冴は顔を歪めた。

「何するんだよ！」と龍冴が怒鳴るが、天山はそれを無視し、計測器を見ていた。

龍冴の人差し指の先端に血が滲んでいた。それを龍冴は舐めていると計測完了のアラームが鳴った。

「やっぱり…。龍冴、貴方がいう頭がボーっとするというのは酔っ払ってるんですよ。

まだお酒が完全に分解されずに循環してるからです。」と天山が龍冴に計測器を渡しながらか説明した。

龍冴はまだ指を舐めながら右手で計測器を受け取り、眺めていた。

「ふへん。これが酔っ払うって奴か…。このいい気分も、ボーっとしてるのかね。」と龍冴は初めての体験を冷静に分析し始めた。

その内、龍冴は元の酔っていない状態に戻り始めて、その体験を喜んでた。

その光景に凱歌は大笑いし始めた。不思議でありながら、子供の様にはしゃぐ龍冴が可笑しくてしょうがなかった。

そんな時、頭を抱えたきなこが入ってきた。
「うるさい！頭に響くから静かにして！」ときなこは入ってくるなり怒鳴った。
その声に全員がビクビクして静かになった。
「天山！お前、薬を凱歌だけに投与したな！」と龍冴が言うと「ええ、そうです。飲み過ぎの罰である二日酔いはしっかりと受けないと。」と天山が淡々と答えた。
その言葉に龍冴は反論する気が失せてしまった。凱歌がきなこの支えと椅子に座られた。
「大丈夫ですか？きなこさん。」と凱歌が問い掛けると「ホイさん平気なの？」と逆にきなこに訊かれてしまった。
「それは天山がアルコール分解剤という薬を打ったお陰で、すっかりアルコールが分解されたんだ。」と龍冴が説明すると、その瞬間何かに気が付いたらしい。
「まさか、プロフェッサーにも打たなかったのか？天山。」と龍冴が訊くと天山は頷いた。
慌てて龍冴が部屋を走って出ていった。

20分ほどしてから龍冴が戻ってきた。その姿は左頬を摩り、溝打ちを押さえながらだった…。
「天山、プロフェッサーには打たないと次の日、使い物にならないぞ。ましてや、危険なんだから。あいたたた。」と龍冴は左頬と鳩尾を押さえながら言った。
「酷くやられましたね…。平手打ちに、鳩尾に正拳突きと言った所ですか…。」と天山はばつが悪そうに言った。
「それだけならまだいい。今、アルコール分解剤を打ったんだけど、それまでに逃げ出しやがったんだよ。あのくそ爺。」と龍冴が言っていると、蒼凱が部屋に入ってきた。
「おはようございます。プロフェッサー凄い事になってましたよ。龍冴さんも相当やられたみたいですね。」と蒼凱は何食わぬ顔で言った。
「酔っ払いに手を上げる訳には行かないからな。」と言いながら龍冴は、テキパキときなこにアルコール分解剤を投与していった。

ー30分後ー

きなこの二日酔いはすっかり治った。そして、調子の良くなったプロフェッサーがやってきた。
「凄いですね、この薬。これがあつたらもう二日酔いなんて無くなっちゃいますね。」ときなこは嬉しそうに言った。
しかし、龍冴と天山は互いに顔を見合うと溜息をついてしまった。
「ホイさんもお酒飲める様にならないとね。」ときなこが凱歌に言い寄っていた。
その光景を見ている内に、『この時が永遠に続けばいいのに。』と凱歌もそこに居る全員が思っていた。
「さて、朝食を済ませたらまず凱歌は脳波検査を受けてもらう。他の者はそうだな…。
蒼凱と天山は愛器の点検をして問題点を後で報告してくれ。
きなこさんは、二人のどちらが空いたら武道の鍛錬をしていてくれ。検査が終わるまではこれで頼む。」と龍冴は言った。全員が了解すると早々に朝食を済ませると行動を開始した。

～第51章～＜心の番人＞

朝食を終えると、龍冴とプロフェッサーに連れられコンピューター室に入った。
凱歌は訳が分からずに、特別な椅子に寝かされ、両手の人差し指にクリップのような物を付けられ、

頭には沢山のコードが付けられた。そして隣の椅子に龍冴が寝ると首の辺りにケーブルのような物を指した。

「それじゃあ、始めるぞ。凱歌心配は要らん。少し眠っていればいい。後は龍冴とわしが見ているだけだからな。」とプロフェッサーは優しく言った。

龍冴はすでに目を閉じていた。そして凱歌のまぶたがゆっくりと閉じていった。

次の瞬間、凱歌は何も無い不思議な空間に居た。しかし、本当にそこに自分が居るのかさえ良く分からなかった。少し歩いていくと、遠くに誰が座っているのが見えた。

凱歌は警戒しつつ近づいて行った。徐々に近くに連れてそこに座っているのが、黒髪の男である事が分かった。その時、まるで頭に響く様に声が聞こえた。

「待っていたよ、君なら僕に会えると信じていたよ。さあ、もっと近づいて。警戒する事はない。僕は君の味方であり、僕を感じた事があるはずだ。」と少年のような声が言った。

この言葉を聞いても警戒を解かず静かに凱歌は近づいて行った。

そして、その椅子に座る男の姿をはっきりと見た時、動揺した。それは龍冴とそっくりだった。ただその姿は15歳にも満たない幼さを残した姿だった。

手袋をしていない右手で顔を隠す様に俯き構えていたが、凱歌が3mほどの所に近づいた時、顔をそっと上げ微笑んだ。やはりその顔には幼さが残っていた。

「この姿を見てすぐに龍冴じゃないと分かった様だね。おっと自己紹介をしないとね。

なにぶん初めてなもので。」とその少年は微笑みながら言った。

「初めまして、凱歌さん。僕の名は”零”。この”心の間”の番人をしています。見ての通り、僕は龍冴と関係があります。そして、禍悪主とも深く関係があります。」と”零”と名乗る少年が言った。

凱歌は状況が理解できていなかった。それに気が付いた”零”は指を鳴らすと凱歌の隣に椅子が現れた。

「気が付かなくてすみません。どうぞお掛け下さい。なにぶんここに僕以外の人が来たのは初めてで。」と少年は恥ずかしそうに言った。

凱歌はためらいつつも”零”という少年が嘘を付いている様には見えなかったので、従う事にした。「順を追って説明しますね。

まずここがどこかと言いますと、ここは”心の間”という仮想世界といった感じの物です。

どんな人間の中にも存在しますが、僕のような監視をする番人が居る者はごくまれです。

もちろん凱歌さん、貴方の中にもこのような世界があります。きっと何か思いつめたり、大きな決心をしなければならない時などに、よく”もう一人の自分に問い掛ける”や”善人の自分と悪人の自分がぶつかり合う”と言いますが、その時に使う所と考えてもらえばいいと思います。そして、龍冴を中心として話をします。知っていると思いますが、龍冴の体は今二つの心を持っています。龍冴と禍悪主という正反対の思想を持つ存在です。

僕はその二つの心のどちらにもつかない、まったく別の存在です。初めに言いましたが、僕は彼らを監視し効率良く体を動かす為に存在する者です。誰にも知られる事の無い存在です。」と”零”は少し悲しげに言った。

「しかし、僕のような存在を持つ人が僅かですが存在します。それは、龍冴と同じ様に複数の心を持つ人です。リアル世界、つまり凱歌さんがいつも居る世界ですが、そちらでは多重人格と呼ばれる人達です。でも、表には出ていませんが、凱歌さんの中にも”もう一人の自分”が存在していて、

何かの拍子に出てくるかもしれませんけどね。

残忍で人を殺したい、自分の力を見せつけたという”もう一人の自分”が。」

と”零”は凱歌を探る様に見つめた。

「と言っても、貴方ならきっと出てこようとしても押さえる事が出来るでしょう。強い心の支えが居るから。でも、龍冴はそこまで支えてくれる人を見つけていない…。だから、禍悪主が出てしまった。

言い訳をする事になってしまうけど、禍悪主が表に出てしまったのは龍冴の心が大きく揺らいだ事と、僕が油断したせいなんだ。もっと僕がしっかりしていれば君達を危険に晒さずに済んだんだ…。

ごめんなさい。」と”零”は立ち上がり深く頭を下げた。

その行動を見ている内に、凱歌は『本当にここは龍冴の心の中なのだ』と素直に納得した。

「でも、今まで誰にも逢わなかったのにどうして、僕に逢う事したんだい？」と率直に凱歌は訊いた。

「それは、逢わなかったんじゃないかって逢えなかったんだ。龍冴や禍悪主にすらね。

だから僕、今とっても嬉しいんだ。どうしてか良く分からないけど。」と恥ずかしそうに”零”は笑いながら答えた。凱歌にはその嬉しいという理由が分かった。今まで孤独に全く正反対の二人を押さえてきた自分を知る人が出来たからだ。

「じゃあどうして僕は君と逢えたんだい。」と凱歌が訊くと、”零”は少し俯いて悩んでから顔を上げて答えた。

「それは、貴方なら龍冴の心を外から支える事が出来るからだと思うんだけど、僕もまだよく分かってなくて…。でも、このままだと龍冴は、また禍悪主に乗っ取られてしまうんだ。

龍冴は明るく振舞っているけど、凄く自分を憎んでいるんだ。押さえられない禍悪主という自分を。

自分を嫌うっていうのは自分を不安定にしてしまうんだ。そうなったら僕が頑張っても、表に出る龍冴が居なければどうもならないんだ…。

龍冴を助けられるのは龍冴に逢える凱歌さんときなこさん、そして博士だけなんだ。

もちろん天山さんや蒼凱さんもそうなんだけど、特に初めに言った凱歌さん達3人なんです。

そして、丁度、龍冴と凱歌さんの心が繋がるチャンスがやってきたんです。」と”零”は言った。

「もしかして脳波検査の事を言っているのかい？」と凱歌は驚きつつ訊くと、”零”は頷いた。

「詳しい説明を受けてないみたいだね。脳波検査というのは、龍冴の脳と凱歌さんの脳をコンピューターを介して繋ぎ、潜在意識などを調べる方法なんです。

でも、何百人も検査してけど、ここに来られたのは貴方だけです。きっと龍冴は貴方を心の底から信じているんだと思います。」と”零”は言った。

「でも、僕に龍冴さんを助けられるのかな…。」と凱歌は不安になった。

「凱歌さんに龍冴を助けたい、恩を返したいという気持ちがあれば大丈夫です。

何があっても龍冴を信じてあげればいいんです。

龍冴はまだどこかで自分が再び人を傷つけてしまうのではないかと不安を持ち、自分でも気付かない一定の距離を置いているんです。

でも、その距離を置いていないのが凱歌さん達3人なんです。

ただ信じてあげればいいんです。」と”零”は真剣な眼差しで凱歌を見つめた。

「分かりました。どこまで出来るか分からないけど、僕は龍冴さんを信じます。何があっても。」と

凱歌ははっきりとした声で言った。その時、”零”が上を見上げた。

「そろそろ戻らないとマズイですね。皆さんが待ってます。」と”零”が言い、右側を指すと光の入り口が出来た。

”零”が凱歌を促され入り口に近づくに連れ、急に『帰らなければ』という気持ちになった。

「あと、龍冴と禍悪主は元々一つの存在だった。

知っての通り、青水 きなこという女性が禍悪主に変化の風を送った。でもきなこさんが死んだ時、禍悪主はそれを認めようとしなかった。そして、禍悪主の心は真っ二つになってしまった。

きなこさんから教えてもらった事すらを認めない、禍悪主ときなこさんから教えたもらった事しか持たない龍冴に。でも、元々一つだった心はいつか一つに戻ります。その時が近づいています。二つの心の距離は確かに近づいています。

一つになる時、どちらかになってしまうのか、それとも二つが一つになって新しい心になるのかは、まだ分かりませんがその時、影響するのはそばに居る皆さんです。話す事も出来ない、知られる事も無い僕じゃない。だから、二人を助けて欲しいんです。凱歌さんには、二人の苦しみが分かると思います。経験からもその優しさ、人間性から。禍悪主も考えや性格はああですけど、本当はいくらでも変われるのに傷付きたくないからって、心を閉ざしてしまった可愛そうな奴なんです…。

そして、二人が一つになる時僕が自由になれる。ゼロに戻れる。」と”零”は幼い顔で精一杯お願いをした。

「分かりました。必ず、二人を助けます。」と凱歌は答え、歩き出す。

「凱歌！君に逢えて嬉しかった。やっぱり貴方は素晴らしい人です。話が出来て良かった。

ありがとうございました。あと、僕の事は話さないで。特に龍冴には…。きっとショックを受けちゃうから。誰も信じないと思うけどね。本当にありがとう。さようなら。もう二度と逢う事は無いと思う…。」

と”零”は笑顔で大きく手を振った。しかし、凱歌にはその笑顔に寂しさを隠した表情が目に見え付いた。そして、強い光に両手で目を覆った。

次に気が付き、目を開けると心配そうに自分を見るきなこの顔とプロフェッサーの顔が飛び込んで来た。「心配したんだからね！」ときなこは怒ったが、その顔は安心でいっぱいだった。

凱歌はそっと龍冴の方を見た。龍冴はまだ目を覚ましていなかった。

心配していると龍冴は少し声を上げて目を開けた。そして、起き上がろうとした時プロフェッサーに頭を押さえられ、「外す前に起き上がるな！」と怒鳴られていた。

ケーブルを外し、首を横に振って失敗を怒られ、笑い流す龍冴の表情に凱歌は龍冴の中に”零”を見た。呆然と自分を見ていた凱歌に気が付いて、首を傾げ「凱歌、俺の顔に何か付いてるか？」と両手で顔を触りながら龍冴が訊いた。慌てて「何でも無いです。」と凱歌は答えた。

「そうか…。しかし、問題はなかった様だな。じゃあ、俺はこれからマオについて調べてくるから、少し待っていてくれ。あと、劉冥を呼んでおいでくれ。頼むぞ。」と部屋を出ていた。

凱歌は、部屋を出ていく龍冴の背中に”影”を見たような気がした…。

～第52章～＜試練＞

30分ほどして龍冴が、ミーティングルームにやってきた。

ミーティングルームには、凱歌、きなこ、蒼凱、天山、プロフェッサーそして劉冥が待っていた。

その沈痛は雰囲気に入ってきた龍冴は驚きつつ、全員の前へと足を進めた。

全員が早く結果を聞きたいと言わんばかりの視線を送って来た。

「そう、目で訴えるな。今説明するから。マオの事だが…。やはりここに入院しているマオこそ

劉冥の実の妹だった。これは、人質印の一致と先に行っていた DNA 鑑定の結果からだから間違いない。君の妹さんだ、劉冥。」と龍冴は冷静に答えた。

その瞬間、劉冥は下を俯いていた。そして更に龍冴は続けた。
「それでものは相談なんだけど、君がしっかりと更正プログラムを受けてくれれば、ずっとという訳にはいかないんだが……。1日2時間程度の面会を許可してもいいと、運難コンビと話し合っていたんだ。あんまりこういう事は天秤に掛けたくないんだが、真面目に更正プログラムを受け、協力してくれば真和との面会、治療を認めるというのは？」と龍冴は頭を掻きながら訊いた。

あまりの事に劉冥は顔を上げ、龍冴を見つめた。そして、「本当に協力するだけで真和に逢えて、治療までして頂けるですか。」と言った。

「ああ。もちろんだ。俺は全力を尽くす。それに真和の一番効くのは、兄である君の支えだ。」と龍冴が言うと劉冥は「よろしくお願いします。」と答えた。その瞬間、全員の顔に笑顔が浮かんだ。

少し間が開いてから龍冴が話を始めた。
「これからについてだが、前にも言った通り、凱歌ときなこさんにはレベルアップしてもらう。まず、凱歌には1日できなこさん同様にリミッター外しを身に付けてもらう。これが出来ないと二人の差は一向に縮まらないし、色々とレベルアップのスピードに影響するからな。凱歌がリミッター外しを身に付けている間に、きなこさんにはこれからの鍛錬内容を決める為にテストを受けてもらう。凱歌には天山が就く。きなこさんにはプロフェッサーと蒼凱が就く。俺はちょっと用があって、君達の鍛錬にはしばらく立ち合わない。鍛錬を始める前に凱歌ときなこさんには順に俺の質問に答えてくれ。別室でな。それじゃあ、まず凱歌から順に来てくれ。」とそういうと龍冴は隣の小さな会議室に入っていた。凱歌は龍冴の後を追って、会議室に入ってきた。

—10分後—

凱歌が帰ってきた。そして、次にきなこが会議室に入っていた。
帰ってきた凱歌に蒼凱と天山が興味津々に「龍冴、何訊いてきた？」と訊いてきたので、凱歌は素直に答えた。
「別に何も。ただ僕の両手をじっと見ながら、好きな色とか、対した事は訊かれませんでしたよ。」と首を傾げながら凱歌は答えた。
「やっぱりアイツ、またやる気だな。そうかそうか、アイツが久しぶりにね……。ありがとう、これで分かった。」と二人は嬉しそうに言った。
凱歌は何が分かったのか聞き出そうとしたが、何かと誤魔化されてしまった。
その内、きなこが戻ってきたが、同じように不思議そうに首を傾げていた。
「ホイさん、何訊かれた？」ときなこが訊くと「あんまり……。手の平見せただけ。」と凱歌が答えると二人とも首を傾げた。
「二人ともこれには色々理由があるんですよ。僕らも龍冴に手の平を見せましたからね。まあ、楽しみにしていて下さい。お二人に合った最高の”相棒”を用意してくれますから。」と蒼凱と天山は微笑みながら言った。龍冴は書類のような物を手に戻ってきた。
「それじゃあ、さっきに言った事を始めてくれ。俺はちょっと外に出てくるから後は頼むよ。」

と龍牙は考え事をしながら言い、部屋を出ていった。

「さあ！始めるとするか。」とプロフェッサーが言う。「よし！」と蒼凱と天山が気合を入れ、凱歌ときなこを見つめた。それぞれの鍛錬1日目が始まった…。

～第53章～＜嵐の前の静けさ＞

－人形の部屋－

凱歌は天山に連れられ、”人形の部屋”にやって来た。

簡単に説明を受けてから鍛錬を始めたが、天山の冷たく鋭い視線が凱歌の背を突いていた。

時に天山からの冷静で客観的な指摘を受けながら、徐々にスピード、技術を高めていった…。

－武道場1－

きなこはプロフェッサーと蒼凱に連れられ、大きな武道場に来了。

蒼凱を相手に試合をする事になった。それをプロフェッサーが見るというものだったが、

それが大変な事だった。蒼凱は身長が190cm以上という長身であり、全く手の内が分からない相手である。そして、きなこ対蒼凱の対決が始まった。

－夜7時－

へとへとになった二人がミーティングルームに戻ってきた。

凱歌は怪我はなかったものの、精神的に疲労している感じだった。

きなこは凱歌とは逆に生傷でいっぱい、いかに蒼凱との試合が凄まじいものだったかを物語っていた。

凱歌はきなこを気遣おうとはするものの体がついていかなかった。

きなこはプロフェッサーから傷の手当てを受けたが、凱歌を気遣う余裕がなかった。

「二人とも意外と体力無いな～。こんな調子だと、本格的な鍛錬が始まったら死んじゃうぞ。」

ましてや、龍牙がいないだけマシだったんだけどな…。

龍牙は鬼だからな。優しい笑顔を浮かべながら、俺たちの無力さを思い知らされるからな…。

あれほど辛いものはないからな。それと比べれば、今日はお遊びにも満たない。」

と天山は冷静に言った。

「まあ、龍牙は別格ですからね。きなこさんにはちょっと悪かったな～と思ってますよ。」

加減はしたんですけど、段々本気になってきちゃって…。でも、やっぱり龍牙のいう通りでしたよ。

あっという間に強くなれる素質がありますよ。」と蒼凱が眼鏡を拭きながら言った。

「凱歌も龍牙の予想通り、素晴らしい素質の持ち主でしたよ。リミッター外しもそんなに時間は掛からなかった。」と天山が説明していると部屋に誰か入って来た。

それは龍牙だったが、疲れきっている感じだった…。

「ただいま…。この感じだと初日から大変だったみたいだったな。俺も色々片付けなきゃいけない事が山ほど合って大変だったんだ。しかも予定の半分しか終わらなかったし…。」と龍牙は溜息をついた。

「結局さ～。元気なのは僕達だけですか！？」と蒼凱が言った。

「ああ。そうなるな…。明日の事だけど基本的にはお前達が決めてくれ。大まかな事は一応決めてあるけど、変更はしていいから。俺、もう寝るわ。食欲も無くなっちゃったから。おやすみ。」と

龍牙はプロフェッサーにFDを渡すと部屋を出ていった。

その有り得ない龍冴の行動に全員が驚いてしまった。

何があっても食事だけは楽しみにしていたのに、それを断り一人別行動をする龍冴を…。

それからは食事を各部屋で過ごしていた。凱歌ときなこはそれぞれの部屋に着くや眠り込んでしまった。そして、時が流れていった……。 (暗転)

ー翌日ー

凱歌は身支度を終え、7時にミーティングルームにやって来た。しかし、きなこが一向に来なかった。

天山が、きなこを見に行くと、疲れからまだ寝ていた。

天山は咳払いをすると「きなこ！ いい加減起きなさい！」ときなこの母美智の声で言うと、ビックリして目を覚ました。

「起きましたか？ 疲れていても時間は守ってくださいね。お先に食堂で食事をしてますから、用意が出来たら来てください。」と天山は何事も無く元の声で優しく言うと部屋を出ていった。

きなこは慌てて時計を見るや身支度を始めた。実は昨日の晩に朝7時に集合を言い渡されていたのである。

ー食堂ー

全員が食事をしていると、きなこが大慌てでやって来た。全員のいる部屋に入るやきなこは「寝坊しました！ ごめんなさい！」と謝った。「別にいいんですよ。初日から大変だったんですから。早く食べて下さい。第一、居なかったのはきなこさんだけじゃないですから。」と天山が言った。

そう言われ、きなこは龍冴が居ない事に気が付いた。

きなこは凱歌の隣に座り、凱歌に「どうして、龍冴さん居ないの？」と訊いたが、「それが朝から居なかったらしい。」と凱歌が言った。

ーミーティングルームー

食事が終わり部屋に入るや、プロフェッサーは昨日龍冴から渡されたFDをセットしファイルを開いた。中には細かい計画が示されていた。

「こんなものを作っていたのか…。これによると…。今日はおっ！ 始めから凄い事をさせるな。龍冴らしい。」とプロフェッサーは言いながら中身を印刷し蒼凱と天山に渡した。

二人とも”なるほど”という顔をした。

「じゃあ、わしが代わりに発表する。まず始めに二人の力関係をはっきりさせる為に練習試合を行なう。

真剣みに欠けている様なら、蒼凱、天山とのタッグバトルとする。

その後、昨日のテスト等を考慮して、凱歌にわしと蒼凱が就き、きなこさんには天山が就き、新しい技術を身に付ける鍛錬を開始する。

この鍛錬は4日間の予定で行なうが、必要とあればもう少し伸ばす。

これが龍冴の計画じゃ。わしらもこれには賛成なのでこの計画で進行していく。お二人さん分かったかな？」とプロフェッサーが凱歌ときなこに言った。

二人は「はい。」と答えた。そして互いの顔を見合った。

「それじゃあ、試合会場に移動するぞ。」とプロフェッサーが部屋を出ていき、全員がその後続いた。

ー武道場1ー

そこは体育館（バスケットコート2面分）ほどはあろうかという大きな量の武道場だった。

全員、鍛錬用のカンフー着に着替え終え武道場に入るや、その場が緊迫し始めた。

凱歌は黒いカンフー着に、きなこは青のカンフー着を身にまとして武道場に現れた。

互いに真剣勝負の為に集中していた。

プロフェッサーは互いに距離を置く二人の真ん中辺りで静かに立っていた。

蒼凱は凱歌のいる側の壁際に正座をし目をつぶっていた。

天山は凱歌のいる反対側、つまりきなこ側に腕組みをし壁に寄り掛かる様にして立っていた。

三人は静かに二人が集中し終えるのを見守っていた。

ー数分後ー

目をつぶり待っていた蒼凱と天山が目を開けた。その時、遂に凱歌ときなこが動き出した。

プロフェッサーが互いに礼をさせると静かに距離を置き、「始め！」と言った。

互いに出方を伺い、距離を置いた。その距離は絶妙だった。攻撃するにも防御するにも良い距離だった。しかしそれは互いに先攻攻撃を難しくしていた。

緊迫したまま沈黙が場を支配し始めた時だったきなこが先攻攻撃を仕掛けて来た。

その動きは今までのスピードを上回る程の高速移動をし、回転足払いからの連続攻撃だった。

凱歌はそのスピードに一瞬動揺するが、冷静にその攻撃を避け、回転を生かした上段蹴りを防ぐや中段蹴りで反撃に転じたが、きなこもそれを防ぎ、再び距離を置いた。

きなこの成長に凱歌は内心焦りを覚えた。そして、このままでは負ける事を感じた。

凱歌は深く深呼吸をし、身を再度緊張させると構え直した。

そして、今度は同時に攻撃を開始した。互いに相手の動きを読み、相手の動きを利用した攻撃を連続で繰り出していった。

その光景は正に糸乱れぬ舞いの様だった。しかし互いの攻撃がことごとく防がれる事に焦れを感じ始めた時、プロフェッサーが言った。

「互いに全力を出すんじゃ！自分の持つ全ての技術を見せつける事が相手に敬を払う事になる。」
とはっきりとした声でプロフェッサーは言った。

その言葉に凱歌ときなこは距離を置く為に、飛び退けるや目の色が変わった。

そしてそれまでには無いスピード、パワーでぶつかり合い始めた。しかし、そばで見ている三人一様に目を細めた。

きなこはその力をためらい無く凱歌に向けた。それは相手を信用している証でもあった。
しかし、凱歌にはどこかにためらいにも似た何かがあった。

それを三人は一樣に見透かしていた。それは凱歌の優しさ、人の良さからである事も。
しかしそれは時に自らを滅ぼす事になるのも身を持って知っていた。

そうこうしている内に徐々に凱歌が押され始めた。それは龍冴が言っていた通り、きなこの方が身体的にも技術的にも、凱歌を上回っていたからである。

これは始めから予測されていた事だったが、その予測を覆す要因は持っていた。

その時、凱歌が“優しいチャン ホイ”から“スナイパー王 凱歌”に変わったのを三人は感じた。

凱歌は今までためらいを持って行っていた未完成だったリミッター外しを完成させ使い始めた。
しかし時遅し、すでに完成し、その圧倒的な安定性を持ったリミッター外しを持つきなこには、

完成したばかりで不安の残る凱歌のリミッター外しは、きなこの相手にはならなかった。

きなこの強力な正拳突きが凱歌の鳩尾が当たろうとした瞬間、凱歌を蒼凱が、きなこを天山が止め、プロフェッサーが正拳突きを抑えていた。

「二人とも互いにご苦労だった。しかし、怪我はされては困るからのう。止めさせてもらった。

なかなかいい戦い振りだったぞ。問題点も見つかったし、収穫は多かったろう。」とプロフェッサーが言った。二人とも息こそ上がっていたが、疲れたとまではいかなかった。

「休憩を兼ねた食事をしたら今度は個別に鍛錬を始めるから、心しておく様に。」と言い、

三人は部屋を出ていった。残された凱歌ときなこは自分達の戦いを称えあい、笑顔で握手した。

～第54章～＜それぞれの決心＞

－午後－

凱歌はプロフェッサーと蒼凱に連れられ、先ほど、きなこと真剣勝負をしていた”武道場1”に来た。

「ここがこれから4日間鍛錬する場所になる。4日間はここで頑張ってもらう。途中で蒼凱がきなこの方に行く事になると思うがのう。」と三人が武道場1に入るなりプロフェッサーははっきりとした声で言った。

「プロフェッサーは凱歌さんの専属になります。そして天山さんはきなこさんの専属になりますが、僕は両者のアシスタントをする事になりました。なので、居る時と居ない時がありますが、気にしないでください。」と蒼凱が説明した。

「ここで鍛錬を行なっている間は、きなこには逢ってはならない。それだけは約束してくれ。

これは、凱歌、君が身に付ける武術に関わってくるからだ。約束できるか？」とプロフェッサーは真剣な声に問い掛けた。凱歌は一瞬驚いたが、「分かりました。僕はきなこさんを”守る力”が欲しい。」とはっきりとした声で言った。

その頃、きなこは・・・。

－武道場2－

きなこは天山に連れられ、凱歌が居る”武道場1”と同じ階層にある別の武道場に入った。

そこは、”武道場1”と同じ大きさだったが”1”とは異なり板張りだった。そこら中に切り傷など素手では出来ないような傷が多く見えた。

「ここは先ほどの武道場とは異なり、基本的に武器を要する場合に使われる鍛錬場です。

つまり、これからの4日間できなこさんには武器を使える様になって頂きます。

知っての通り、凱歌ときなこさんの違いは、凱歌には武術以外に狙撃術がある事が、戦略上有効になります。しかし、きなこさんには、失礼ですが、武術以外に何も無いと言っていい。ですので、何か貴方に合う武器を身に付けて頂きます。

我々の見解を先に言わせていただければ、貴方はとてもしなやかな動きをさせる。この点から我々は”太極剣”が適していると考えました。

もちろん、これは我々の勝手な見解ですので、これから色々と試して頂いて決めて頂いて構いません。」と天山は冷静に説明をした。

きなこは絶句していた。天山が説明をしながら、開けた扉の向こうに並ぶ武器の数々に・・・。
「凱歌の拳法、”詠春拳”は中国拳法では代表的な外家拳、つまり肉体を物質的に鍛える拳法で、反射神経を養い、細かい手業で攻撃を封じ、すかさず攻撃する事を主とする高い即実性を持つ拳法です。きなこさんの少林寺拳法は誰でも使えるようにした物と言っていい。

確かにきなこさんほど使いこなせれば、ある程度の敵なら対応出来ますが、
范 火清などの中級以上の相手には対応が難しくなる。

そこで本格的な中国拳法、もしくはそれに匹敵する拳法を再度身に付けて頂きたい。

時間をあまり掛けられないのですが、一般的に知られていて身に付けやすい”太極剣”を
やって頂きたいと思ってます。”太極剣”は”太極拳”の剣を使ったものです。

”太極拳”は凱歌の”詠春拳”とは違う内家拳です。つまり体内の気を操り、力に変える拳法です。
その為、気を使いこなす必要がありますが、ここは剣を扱う型だけを重点的に身に付けて頂きます。」
と天山が説明する。その時、きなこがここへ来て初めて口を開いた。

「天山さん、4日間で”太極拳”をマスターする事は不可能ですか？どんなに努力しても。」
ときなこは、はっきりとした声で言った。

天山は強い決心に似たものをきなこの声に感じ、驚きつつ振り返った。
「どんな努力でもと言ったね？確かに普通に鍛錬をしては、型をマスターするのが精一杯でしょう。
しかし、きなこさんが死ぬ以上の努力をするというのなら、完璧とまではいかないでしょうが、
かなりの使い手にはなれるでしょう。
ただそれはきなこさんを女として扱わず、守るべき相手としても扱わないぐらい凄まじいものになる。
それでもいいなら私は貴方を”太極拳”の上級者にしてあげます。」と天山はいつに無く真剣な声で
言った。しかしそれにも増して、きなこの意志は本気だった。それを感じた天山は、しばらくきなこを
睨みつけた。その心に揺らぎが無いかをみる様に。

「その思いは本気の様ですね。分かりました。貴方をこの4日間で”太極拳”の上級者にしましょう。
覚悟してください。その間は凱歌に会う事も出来ない過酷なものになります。どんな時よりも
苦しく長く感じるでしょう。その意志が揺らぐ事があれば、すぐにもやめますからね。」と天山は
はっきりとした、そしてためらいにも似たものを含んだ声で言った。

「よろしくお願いします。」ときなこを深々と礼をした。「こちらこそよろしくお願いします。」と天山も
深々と礼をした。

一方、きなこがとんでもない決心をしている頃、凱歌は…。

— 武道場1 —

「それではここで行なう事を説明する前に聞きたい。

聞く所によると、1211のボス、コー村木は”気功”の使いだと聞いたが本当か？そしてその力を
目の当たりにして何を思った？」とプロフェッサーは真面目な顔で訊いた。

「確かにコーは気功の使い手でした。そのスピード、破壊力は、圧倒的でした。

その力は僕らが持つ力では越えられないのでは、とさえ思いました。」と凱歌は言った。

「僕ら」か…。つまり気を倒すには気しかないと感じたわけだな…。

凱歌、確かに前回の拳法、詠春拳は外家拳。つまり気を全く使わない拳法じゃった。
蒼凱早速だが相手になってくれ。凱歌、これがお前が越えられないと思った力か？」とプロフェッサーが
凱歌に話し終える前に蒼凱が操る棍棒が振られた。それを安々と避け、蒼凱の背後に回り
右手を軽く蒼凱の背にかざした。その瞬間蒼凱が木の葉の様に吹き飛ばされた。蒼凱は棍棒を上手く
使い、5mほどの所に着地した。

「これが”気”という目に見えないが人が持つ力じゃ。こんな老体でありながら、蒼凱の攻撃を避け、
大きな打撃を与える事が出来る。もちろん人それぞれその力の強弱、使える、使えないという点が

あるがのう。そして、凱歌。お前はその数少ない強い”気”を持ち、使える人間だ。

これでこれから行なう鍛錬の内容が分かると思う。」とプロフェッサーは息一つ乱れる事無くしっかりと目で言った。

凱歌はその言葉を理解したが、心のどこかで”コーと同じ力”を持つ事を嫌がっているような気がした。それをプロフェッサーは敏感に感じ取った。

「やはり敵と同じ力を持つのは嫌かのう？それともそれを持った自分が恐いか？あの圧倒的と言った力を持つ自分が。しかし、凱歌、気が付いていると思うが”気”を使う者を”気”を使わずに倒すのは難しい。増してや、その実力が上級ならなおさらの事。使える”力”は使った方がいい。

使わなくても”気”は常にその人間から放出され続ける。もったいないだけだ。」とプロフェッサーは微笑んで言った。

「もちろんこの4日間で上級者になるには相当の鍛錬を必要とするが、一般人よりかは遥かに早い。そして強くなる。ただそれは凱歌、君の意志次第だ。どうしても嫌というのならコーと戦う時は、わしなど”気”を使える人間が戦えばいいが、不服じゃろう？

自分をスナイパーに変えたコーを自らの手で倒したいだろう？ならば、その身に持つ力を使え。力は使い方一つで”人を守るもの”から”人を苦しめるもの”に変わる。それはその力を持つ者の心次第。」といつに無く本気目のプロフェッサーは言った。

「僕はコーを倒したい。そして、二度と僕のような人間を出したくない。

僕にその力があるのなら、僕はその力で人を守りたい。どんな努力も惜しまない。」とプロフェッサーの探るような視線を返す様にプロフェッサーを睨みつけ、凱歌が言った。

プロフェッサーは嬉しそうに笑いながら、「やっぱりお前は救うに値する人間だったようだな。」と言うと凱歌の少し前まで来ると、咳払いをした。

「お前の思いはしかと分かった。さっきなぜきなこさんと会うなど言ったのは、”気”は心じゃ。

少しでも乱れれば自分に跳ね返ってくる。そして、お前の弱点はきなこさんに弱く、心揺すられる事にある。それもこの4日間で克服してもらおう。苦しくともきなこさんも辛いのだと思い、

そして”守られる”のではなく”守る側”にあるんじゃ。」とプロフェッサーは言った。

「これから4日間、よろしくお願いします。」と凱歌は静かにそして深々と頭を下げた。

「その意志が変わらむ事を祈っておる。よろしく。」とプロフェッサーも礼をした。

これから二人の地獄の4日間が始まった。互いの決心を知らぬまま……。

ー続く